



蘭谷一帯はこの後に行政によりすべて壊された(2000年12月)



蘭谷のボランティア施設で勉強する子ども(2000年11月 撮影・趙文英)



試験村にあふれる試験食堂、試験読書室、試験書店(2010年5月 撮影・李康元)



試験食堂のひとつ。営業時間に月極めでも食事ができる(2010年5月 撮影・李康元)



試験村の公園には、考生が休息と情報交換に集まる(2010年5月 撮影・李康元)

エリートは 語るべきがでないか

おたしんべい
太田心平

民博 研究戦略センター

ソウルを自分のフィールドに決めてから二年が過ぎ、市の南端の新林地域、さらにその南部に引越した二〇〇〇年の終わりごろ、わたしの調査は揺れていた。

新林南部は山で東西にわかれる。東側はソウル大学で、西側にはそのころまで蘭谷とよばれる貧民街があった。ソウル大には、蘭谷でボランティア活動に励む学生が珍しくなかったし、そうするうち蘭谷の人びとの声なき声を記述することに目覚める社会科学者たちもいた。そんな学生たちを指して「蘭谷派」なる呼び方まで聞かれた。

当時のわたしは、工場労働者やホームレスの支援活動にかかわりながら、社会の底辺層の研究を始めようとしていた。蘭谷派の学友たちからも多くのことを学んでいた。ただ、自分はどうも蘭谷派にはなりきれない。真逆に近いことに気を取られはじめていたのである。

考生の暮らし

わたしが新林で最初に住みついたのはソウル大と蘭谷の狭間にある小さな地区、「考試村」。ここは国家試験の受験(考試)対策のメッカとされ、有力な予備校が散在し、法曹人や高級官僚を志す若者たちが全国から集まっていた。わたしが住んだのは、マンションでもワンルームでもなく、「考試院」のひとつ。部屋は四畳半たらずの狭さで、シャワー室、トイレ、洗濯機は共用だし、炊事施設もない。ただ、机と椅子と本棚は備えつけて、保証金が不要、家賃も安い。築二年と新しく、小さいながら窓もあり、冷暖房がつねに利いていたが、それでも月極め家賃が公共料金込みで二七万ウォン(約二万五〇〇〇円)だった。

ここに引越してすぐ、同じ建物の窓なしの部屋に住む二九歳の「考試生」Wと知りあった。彼の一日はざっとこんなふうだ。まず六時ごろに起き、すぐ近所の「読書室」に行く。ここには間仕

「いいことだ」と褒められたり、「それで韓国全体が語れるわけ？」と貶されたりするものだが、Wは違った。ただ、時どき「考試生もある意味で底辺なんだけどなあ」と苦笑いしていた。

エリートの帰還

それから四年が経ったころ、弁護士になったWが訪ねてきた。会って近況を話すうち、彼は熱っぽく語りだした。おおよそこんなふうだ。「弁護士も人間さ。蘭谷の人びとと同じくね。癒えない傷も、特有の苦悩も、非合理的な人間関係や、迷信的な精神世界もある。でも、それは贅話話だっというわけて、大きな声じゃいえない。他の立場の人には理解も代弁もしてもらえない。きつと出来ないし、関心もない話さ」。

すでにわたしは底辺層の研究から身を引いていた。底辺層支援の同伴知識人の思考や、そのもとになる認識や社会関係などを調査し、フィールドを去ろうとしていた。サバルタン(虐げられた人びと)を対象化する蘭谷派とは対照的に、エリートを対象化しようとしていた。あらためてこのとき、Wとの出会いがわたしの研究の転機だったのかと思った。わたしの見つけた方向は、弱者研究の流行に待ったをかけた有名な専門書『サバルタンは語るべきか』をもじっていわば、「エリートは語るべきでないか」だったのだ。

青春をなげうつわけ

どうしてWはこんな生活をしているのだろう。もちろん司法試験に受かり、法曹界に入るためだ。ただ、Wはその理由を「この国の正義のため」などという、ありがちな口上では語らない。「結局は人よりうまく生きたいからさ」。

Wは有名大学の法学部を卒業している。大学の友だちのなかには、一流企業に就職して、それなりにうまく生きている者も多い。「もう係長に就いていたりしてね」。それを見ると、自分が惨めに思えることもあるという。でも、司法試験に受かったら会社員とは人生の格が違うのだという。Wはよくわたしの研究の話を開きたがった。底辺層の研究をすると話せば、韓国ではしばしば